

SRID NEWSLETTER

No. 371 OCTOBER 2006 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内
URL: <http://www.srid.jp>

10 月号

縦型管理社会から横型契約社会へ (1) 雇用制度と社会構造

日本福祉大学 経済学部教授 今井 正幸

グローバルフェスタ 2006 出展

学生部

お知らせ

1. シンポジウム 10 月 28 日 (土) 10 時~17 時 会場: JICA 国際協力総合研修所
テーマ: 新たな開発協力のあり方ー拡大する脆弱国家群への取り組み
2. 幹事会 11 月 10 日(金) 午後 6 時 30 分~8 時 30 分 場所 JBIC
3. 退会 池田 誠さん

縦型管理社会から横型契約社会へ (1) 雇用制度と社会構造

日本福祉大学 経済学部教授 今井 正幸

縦型管理社会とは

バブル崩壊から 90 年代を通して今日まで、日本経済・社会に対する批評は悲観論が多数派を占めていた。政治は混迷し、不祥事が続き、社会の弱点が露呈され、膿は出尽くすことがなかった。世に改革論・提言はごまんとあっても到底纏まりが付きそうになかった。また、扇動的な印象を伴った楽観論も見受けられたが、あまり説得力はないように思われた。

一つの要因を以って社会のあらゆる事象の原因であるとするのは本来不可能な試みであろう。しかし、これほど多くの問題が同時に起きているということは、日本の経済・社会構造を支えているシステムそのものに疾患、あるいは不適合な体質

があり、それを根こそぎ撤去するか変革しないかぎり日本の未来は明るくならないと考えても、あながち空理・空論ではないように思う。

社会全体の縦型管理システムとは、先ず職業として属した組織に全人格的な忠誠を誓うことによって個人は長期の生活を保障され、組織間においては官と民、あるいは大中小の組織形態によって上下の関係が作られるという型を採る。組織内の個人には役職・年次などの序列を用いて秩序とする。全くの個人関係以外では、対等に円テーブルにつくのではなく席次を定めるという習慣など、日本社会が余りに長い間身を委ねてきたので、このシステムを他のシステムに変更することには考えが及ばなかったのではないかと疑問を抱いた。

民主主義・市場経済という社会を運営する仕組みは、個人主義・契約社会というシステムをベースに欧米が作り上げてきたものである。しかし優劣の評価は別として、果たして個人主義・契約社会というベースは日本に定着していたのであろうか。

「木に竹を接いでも土壌が強固であれば定着して 20～30 年はうまく伸びるだろう」とは 70 年代初め社会の土壌が荒れきったアルジェリアで開発事業に携わっていた筆者の感想である。そして、その頃の西欧社会のゆとりに接した筆者は「畢竟、縦型管理システムは市場経済になじまないのではないか。最終的には破綻を招くのは避けられないのではないか」という疑惑を持った。これに対して「いや日本は戦後の復興、高度成長、そして国際的には大債権国として国家経済トータルでは巨大化し、成功を続けたではないか」と反論されるかもしれない。確かに官僚指導、産業再編成、諸々の日本的縦型システムは戦後 30 年間、もしくは 80 年代半ばまでの 40 年間、国民の資質という強固な土壌に支えられて有効に機能し、成長の実績となった事実は認めよう。だが、ある時代に有効に機能したシステムは内的・外的与件が大きく変化すると利点より弊害が大きくなるものだという歴史的な命題を忘れてはならない。景気回復、行政財政改革、構造改革、政治改革等、この 10 年、処方箋は数知れず現れた。しかし残念なのは、全ての問題の根底にある社会構造そのものにメスを入れ、その原理を明快に説明する論評に遭遇しなかったことだ。

2. 変貌の過程

評論家が百家争鳴を続けている間に、現実社会では抵抗と軋轢を伴いながら縦型システムが変質し、崩壊し続けているようである。元来、このシステムは上下の絆と集団組織の自己防衛力が極めて強い本性を有しているから、既存の権益（上下の地位であれ、組織益であれ）を削減して変革を行うには常に抵抗が大きい。そのために、あるべき改革はしばしば遅延する。とはいえ、90 年代初めから続く経済の

不況と社会の混迷は否応ナシに社会変革を強制した。多大の犠牲を伴う変革は実相として縦型管理システムを崩壊させてきているように見える。つまり評論家が個別問題への対処療法を論じて批評や提言を繰り返している間に、現実にはあまりに長く続いて当然視されてきたこのシステムを崩す力学が働いたのである。

90年代を通して生まれた数多くのリストラによる失業者の姿は終身雇用と呼んだ生活の安全装置が幻影であったことを人々に周知させた。マスコミの論調はすべて「労働者よ覚悟せよ」のニュアンスであり、労働者側の変化、例えばそれまでのような忠誠心は期待できないから「雇用者よ心せよ」と雇用者に警鐘を鳴らすというトーンは殆どみられなかった。

官僚機構の統廃合については中央官庁の合併を見てみると、縦型のものを合体させただけという姿から、中途採用を始め、雇用方法や、給与基準の変革など既存の制度を崩して、あるべき方向に少しは進んでいるようにみえる。特殊法人の統廃合は抵抗も大きく難物中の難物であるが、民営化に向けて多少は進んでいる。80年代の行政改革では国鉄と電電公社の民営化で大騒動をした経験を教訓として想起しよう。公企業がある一定の時期以降には弊害が大きくなるのは、究極においてその存在と関連する規制が市場の原理、自由競争を阻害するからである。自由競争を進めた結果、独占や寡占化した大企業が公益を侵害するが、これはまた別の対応策で考えるべきである。

政治改革については、次の事実からこれまでは絶望的なまでに期待がもてなかった。なぜなら、先進国と呼ばれる国々の自由主義社会には利害を異にする社会集団があり、それぞれが支える政党がある。それが時代の推移に従って、いずれかの社会集団の要望が強くなったり、どちらかの政策が行き過ぎたり、飽きられたりして政権の交代が生じるような構造になっている。しかし、日本は一億総中流階層意識の社会と言われ、戦後数ヶ月の片山内閣を例外として万年保守党の政権であった（村山内閣も保守政権である）からである。

ともかく、この長期不況で少し変化が起こりつつある。この変化が成熟した市民社会が持つ本当にゆとりのある生活を実現していくのか、国民にとって利のある方向に進んでいくのかを良く見つめよう。やがて経済は上向き失業率も改善されて、新しい事業や社会集団が新しい行動をとるであろうし、情報をはじめとする多くの新しいテクノロジーが否が応でも社会の変化をもたらすであろう。しかし、その変革が国民生活にとって望ましい方向に進んでいるのかどうかという疑問が付きまとうのは、この縦型管理社会が極めて頑固な体質であることを知ってきたからであろうか。（続く）

グローバルフェスタ 2006 出展

学生部

9月30日、10月1日、日比谷公園にて、「グローバルフェスタ 2006」が催されました。SRID 学生部は、昨年に引き続き、今年もこのイベントに参加いたしました。

今年のグローバルフェスタのテーマは「食」ということで、会場内にはたくさんの食品店舗が並び、「食」を通して国際協力について理解を深める取り組みが行われていました。今年は、あまり天気にも恵まれず、二日目は、雨という悪天候ではありましたが、一日目は、35,946人、二日目は、30,750人と、多くの人々がグローバルフェスタの会場を訪れていました。各ブースでは、JICA,JBICをはじめとして、多くの国際機関や各国の大使館、国際協力 NGO のスタッフ、ボランティアの方々が、それぞれの活動内容や、国際協力に対する思いや取り組みを熱心に、またゲームを交えつつ楽しく、来場者の方々に伝えていました。

例年、SRID 学生部は、この出展により、多くの学生や社会人の方々が勉強会やメーリングリストへ参加され、SRID 学生部のネットワークを広げてきました。今年も、さらなるネットワークの拡大に向けて、SRID 学生部は出展いたしました。出展内容としましては、以下の5つを中心に行いました。

①SRID 学生部の活動紹介

日ごろの活動の中心である勉強会のレジュメや、講演会の様子などの紹介を通し、SRID の特色や目的など、ブースに来ていただいた方に伝えると共に、後期からの学生部の勉強会やメーリングリスト、本会のシンポジウムへの案内などをいたしました。

②スタディーツアーの報告書（写真も含む）の自由閲覧

これまでのスタディーツアーの報告書（フィリピン編、カンボジア編、インドネシア編）の自由閲覧を行いました。ブースの壁にたくさんの写真も貼り、視覚的にも楽しんでいただきました。

③新 ODA 大綱に冠する構想案の自由閲覧

三年前に発表された新 ODA 大綱に関する SRID 本会のパブリックコメントと、パブリックコメントがどのように新大綱に盛り込まれたか分かるように、新 ODA

大綱と合わせて自由閲覧を行いました。今年度より、また新たに SRID の本会と共に、「脆弱国家への支援」についての政策提言に関する取り組みを行うため、そのことを説明する際に、来場者はイメージがつかみやすかったと思います。

④SRID 学生部玉川大学支部による展示

例年に引き続き、SRID 本会会員である高千穂先生のゼミ生が、今年も ODA に関する展示を行いました。ODA の現状把握や、それに関する調査を行い、その結果と結果を踏まえ、自分たちは何ができるのかという考察を、模造紙を使って展示していました。当日は ODA に関するアンケートも行っていました。

⑤クイズラリーへの参加

来場者を増やし、玉川大学の学生と交流を深めるという目的から、今回はゲームラリー2006 に参加いたしました。今年のグローバルフェスタのテーマが「食」ということで、食と国際協力とを結びつけたクイズを出題いたしました。その甲斐があり、当日は学生に加え、多くの社会人の方々が SRID 学生部のブースに訪れ、一般の方々からの SRID の認知度の向上につながりました。

最後にはなりましたが、今回の出展の機会を与えてくださり、ご協力くださった本会の方々に厚い感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。